

地元のきずな 絶やしません

岐阜市立本荘中学校 1年
島田 梨央(しまだ りお)

これより東のだどう様

私は、小学5年生から、「本荘雨乞い踊りを育てる会」の一員です。今は、太鼓担当を卒業して、横笛に挑戦しています。

「本荘雨乞い踊り」は、戦国末期に始まったと言われています。江戸時代には、本荘地区は、加納藩の「三千石の米所」と呼ばれたそうです。人々は、代々、米づくりと向き合ってきたのです。そんな本荘でも、日照りや洪水がたびたび起きます。人々は、天に豊作を祈願するようになりました。雨乞い踊りはここに起源を持つようです。この踊りは、本荘神社から加納宿までの往復路を練り歩く、「祈りの行事」として、受け継がれ、守られてきました。

ところが、明治に入り、やがて日露戦争が始まります。「君、死にたもうことなかれ」です。若い命は戦地にかり出され、この文化は、受け継ぐ若者もなくなり、やがてぶつりと途絶えてしまいました。それから1世紀、この伝統文化の細い糸は途切れたままでした。

ところが、今から10年ほど前、奇跡が起きます。本荘神社拝殿の天井裏から、1枚の写真が発見されたのです。それは、明治28年の雨乞い踊りの様子を捉えたものでした。竹刀を背負う人、横笛を構える人、太鼓を抱える人の姿。本荘神社に勢揃いした若者たちの表情のなんときりりとしたことか。

この写真の発見を機に、地元『本荘の歴史を語る会』の皆さんが立ち上がり、調査を始めました。

道具も、歌も踊りも、祭りに関するものは何一つ伝わっていません。それでも皆さんは、資料も求めて奔走し、懸命に調べたのでした。本荘にお住まいの浅野晃一郎さん、和田浅治さんを中心に、多くの方が踊りの復元に尽力されました。

すると、ないと思われていた雨乞い踊りの歌詞に、奇跡的に巡りあうのでした。浅野さん、和田さんは、『祖先の遺志を受け継がなくては』という熱い使命感に包まれたそうです。

その思いは、地域を越えて人を動かします。各務原市の太鼓保存会の関係の方のご支援で、歌詞にメロディがつき、楽譜になりました。しかし、太鼓がありません。高価な太鼓。まず1つは宮司さんからご寄付をいただき、さらに3つか4つがあればと悩んでいたところに、文化庁の伝統文化補助事業に岐阜市の推薦を受けて、資金をご提供いただけるようになりました。さらに、岐阜女子大学家庭学部からのお申し出で、素敵な祭り衣装までいただいたのです。

細い細い糸はついにつながり、形になりました。

この春、私たちは、第6回の成果発表会を行いました。加えて、大学祭やジュニア文化祭でも雨乞い踊りを披露しました。そして新聞やテレビの協力を得て、この伝統文化を発信し続けています。

私たちは、地域の公民館や小学校を拠点に活動しています。小学生が高齢の方とともに練習するのです。年齢を超えた学びです。おじいさんやおばあさんとの楽しく厳しい時間。それは地域の絆です。貴重な機会ですね。

ただ、復活はしたものの、伝統文化の継承には、新たな課題がはだかります。後継者不足がそれです。教えてくださる皆さんは、すでにご高齢で、会長さんも悩んでおいでです。参加対象を『小学生』に限定しているため、中学生以上の若者は参加できません。このため、今年からは、中学生も参加できる制度を設けました。現在は、私も含めて3人が、中学生として活動に参加しています。

伝統文化を守ることは、地域の人とのコミュニケーションを育み、絆を強固なものにしてくれます。このような地域に住むことは、私の誇りです。私は、この本荘の伝統を守るために、大人になっても協力をしていきます。

自分にできるほんの小さなこと。それを通して、自慢できる地元を創り上げることがができます。それが、私のささやかな幸せです。

黒雲てんじて雨おくれ